

景色が変わった入園面接

来春から幼稚園に入園しようというお子さんの保護者の方々に面接をする機会がありました。かれこれ10年以上続いている保護者面接ですが、ここ2~3年で著しく様変わりしたのが父親参加の激増ぶり。平日にもかかわらず、今年はおよそ8割くらいだったでしょうか。お父さんもいっしょの面接、数年前までは決して多数派ではありませんでした。

いわゆるブランド幼稚園であれば、以前から両親そろっていたのかもしれませんが、私が出かけている幼稚園は、ごくごく普通の地域の子どもが通う幼稚園。普段着とはいわないまでも、お受験ファッションで親子そろって面接に臨むような園ではありません。やはり、時代の空気は「共育て」へと急速にチェンジしているようです。

力まず、気張らず、父さん参加

「今日は休暇を取って幼稚園に来ていただいたんですか？熱心ですね」。私が声をかけると、「やはり、父親として大事なことだと思うし、なるべく子どもの成長にかかわりたいと思っているので」とか、「別に熱心というほどではないんですけど、父親も来るのがフツーなのかと思っていました」と返ってきます。照れ笑いしながら、「息子の入園面接なので休暇いただきますと課長に言ったら、せいぜいボ口を出さないようがんばって」といとお父さんも。さらに、今回は「僕、育休中なんです！」と言うお父さんが初登場しました。

多くは30代前半あたり、若い父親のみなさんにとっては、入園面接は家族そろって出かける家族イベントであるかのように、自然に足を運んできていたようでした。

やっぱり出てくる、建前と本音

しかし、そういうお父さんたちも、もう一皮むいて日ごろの子育てへのかかわり方を尋ねてみると事情は変わってきます。ピンは育児休業中から、ほとんど奥さん任せで何もしな

いきりのお父さんまで、かなりのばらつきようです。

そんな彼らがもらした一言を少し紹介してみましょう。「やはり、自分は働き盛り真ん中ですし、楽な仕事でやっているご時世でもないですし。平日から子育てにかかわるのは難しいです」とか、「やっぱり、日ごろの子育ては、中途半端に自分がかかわるよりも妻に任せたほうが子どもの成長にいいと思うんです。父親にできることは、こういう大事な節目で出てくることじゃないかな」という意見も。また「会社でも、ワーク・ライフ・バランスとかよくいわれてますけど、正直無理ですよね。父親として子育てにどのくらい、どのようにかかわるべきか、わからないままになんとかやってきてしまいました。これから、どうすればいいんでしょうね?」と、逆に質問を投げかけてくるお父さんまでさまざまでした。

あなたはどのタイプ?

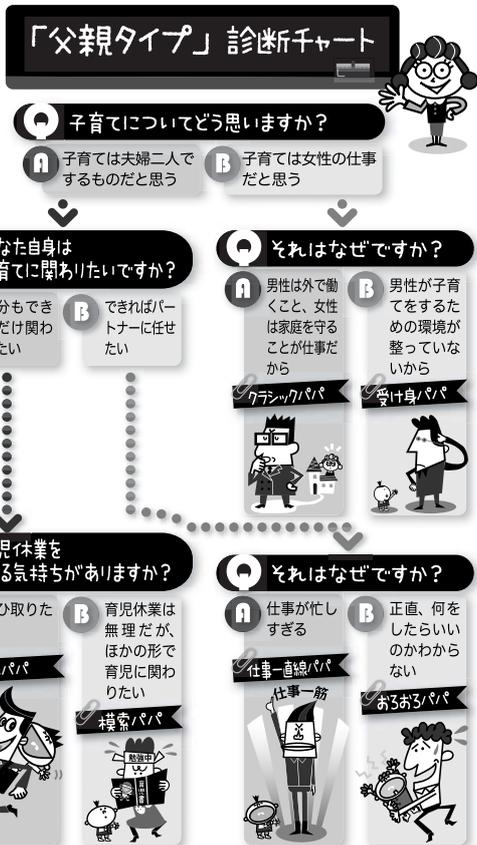
こういうお父さんたちの姿、本音、悩みこそ、ナマの「男たちのワーク・ライフ・バランス問題」です。放っておいてはいけません。そこで、私たちの研究所から発刊した書籍『男たちのワーク・ライフ・バランス』のなかでは、「父親タイプ診断チャート」と、タイプ別の処方箋を提案しました。読者のみなさんからも好評のようです。

これは、イエス・ノーで質問に答えていくと自分の父親タイプにたどり着くというもの。「積極パパ」、「模索パパ」、「仕事一直線パパ」、「おろおろパパ」、「クラシックパパ」、「受け身パパ」の6タイプ、あなたはどのタイプにたどりついたでしょうか。ちょうど子育て真っ最中の方だけでなく、すでに子育てを終えてしまった方も、あの懐かしい子育て時代を思い出して試してみてください。きっと、部下の気持ちを理解しやすくなるはずです。

ちなみに、私たちがこれまで大勢の方々に試してもらってきた結果では、もっとも多いのが「模索パパ」のようです。これらの6タイプ別の処方箋については、次号から2回に分けて説明していきたいと思います。ご期待下さい。

(なかま・しんいち)

※この連載は、ヒューマンリソース研究所の中間真一主席研究員と鷲尾梓研究員が交互に執筆します



中間 真一 株式会社ヒューマンリソース研究所 主席研究員

1959年生まれ。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業後、富士写真フィルムを経て現職。オムロングループのシンクタンクとして、学ぶ、働く、暮らすという切り口をもとに、生活実感を大事にしつつ、生き方、社会、技術の今そして近未来を探る。共著書に「スウェーデン—自律社会を生きるひとびと」(早稲田大学出版部)、『男たちのワーク・ライフ・バランス』(幻冬舎ルネッサンス)。

